



No.

洞  
友  
鳩  
集  
叔  
記



康工老人の姿情の論をふたゝひいはし姿も  
 情ともいふ事ながれと我老人が言にて議論尽  
 たり、老人の情といはるゝい胸中のまことか  
 ず一也、人をたゝますくはするの工夫なるゝ  
 し、あへたる教示なりけり、さるを端々情  
 のみと定たるやうなるこそ本意なけれ、  
 今美懐人の詞の姿心のすかたとやらんおのれ  
 心をいひ出さる取にたうす、和歌集に足るも  
 の間もつにつけてとあるにて明らかなり、足



十行 廿字詰

とはあまり假初なり。祢歎したるをありのま  
 くに連たるをいたつら言といふて言外を聞さ  
 る人を友とせんや。假令ハ「春立てまた九日  
 の山路哉」草の葉を落るより飛雪哉。物を感  
 じて出たる章に意味句中に籠さるハなし。言  
 外を聞がる人を儔とする老人にても我老人に  
 こもあるまし。人を尊に一方にせんハ邪路也  
 。姿情ふたつをもて教ゆるハ正路也。ハ松露  
 土毫のニ老人が謂ならすや。然るかゆへに贈  
 れる文にふたつにしていふ事なけハはさ

るもの聞ものに興るをまことの情といふの外  
 なし。足るものを見て觀起り聞ものを聞て歎  
 死す足す聞さるの先に情出る事當てなし。箱  
 の須戸の秋の章の見詠觀の三言にても詳也。  
 ありハハ康老人の言に姿を軀に建し句は目を  
 喜しむ。情を餘せし句ハ心を動しむといへる  
 もはや求る也。造化の自然は無心より出て姿  
 情備ると申さるしのみにて止(かたし)ありハ  
 康老の言におのつからるの姿とのみ欠て儻ハな  
 ハ徒言ならん。姿は形な水ハいふに及あまし

十行 廿字詰

るや

全

江戸

江左

發句工案題詠なる時は眼前に其物あらされは  
 おもひ斗るものからニハ句ふものニハ蒼白な  
 るもの甚しきい題の名の字義にさへかゝりて  
 情をのみくするしめて自然を得るにうとし、許  
 六ハへらく題を箱に入置其うへにて乾坤を廣  
 く尋よと達人に至りてハ題詠の替古ハ入らす  
 造物を足て歎し興るもの也。いは、姿情の論  
 もなくおのつからう姿情調ふかゝる事を辨たる

十行 廿字詰

No.

人に姿は先情ハ後情か先姿が後とふたつに存  
 すいはれなし。初心なる人をすゝむる時はか  
 たよらすして姿情を一對にして教へき也。人  
 を推して咎人より姿情を兩輪として手引せは  
 おのつからまことに入へし、姿情ハ人に陰陽  
 のしほらくも離ましき自然也。なんそふたつ  
 にして好悪をいはんやと我老人が言にて増は  
 明たるを再應情を専らなるやうに論あるを  
 もふにこなたより姿を第一にと古人の立たる  
 もむへ也といふを然ていはるゝならん、おハ

採菊東籬下悠然見南山東坡曰採菊之次偶然と  
して山を見り、初より意を用ゐず景と意と會  
すと故人の姿を先にといへるにも又其故あり  
と顧て稱たる也。康老人の章をもていは、  
44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44  
44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44 44  
と見るより忽然と當初を感しおもひやりて涕  
泣したるなりと知る其地に至らずして此慨嘆  
出るべきや、情は物に依て起る、姿情は須臾  
の間ならずや。

十行 廿字詰

合

湘中

青雨

馬光の章 永き日やおなし事してといふ七文  
字に永き日の間をことハるとある微細の解が  
た甘大し侍り、しかしながら春の日やと聞時  
は磯の波の<sup>の</sup>とやかにして同じ事にうつさまを  
稱したる章とやいはむ、かゝる章の解は其人  
ゝにかはりある一し、希因の章は同じ事して  
に一とせを二めて世の中の人さまざまによそへ  
ぬるハ歎すべきや、<sup>蘭</sup>更の宮守氣を吐の章ハ  
我老人か<sup>い</sup>子<sup>處</sup>ハ氣をはくを正に足られける

16

やとの疑ひにして古<sup>の</sup>論にハあらず。不貪  
夜識金銀氣といへるは杜<sup>甫</sup>か杜<sup>甫</sup>たる所也。  
半化の胃中は謀かたけれとも聊疑ひあるゆへ  
にとかめたり、まことに見されハ虚言也、あ  
るひほ中<sup>く</sup>に耳の聞えてかんニ鳥。耳が聞  
えて聞かゆへにこそ淋しけれ聞えずはよから  
んにといふ章なればかんニ鳥は夏の鳥にて草  
木茂して他に淋しき事さうになし、秋鳥のみ  
聲を聞けはあらずひした、にさびしきものを  
取添たる章は困古鳥の時候にあはずと土竜松

十行 廿字詰

露の老人か門弟子に説る、所<sup>く</sup>、うき我を淋  
しかうせよといふ章を味ひ見ればまことにか  
んニ鳥にししてしかも夏なる所あり、はた蓑虫  
の音を聞に來よといへる章の問ひは我老人か  
第一なる趣意<sup>く</sup>、い<sup>が</sup>ばその中康老た、に足<sup>り</sup>  
に給ふらん、い<sup>が</sup>かし、無影を見無弦を聞人な  
らてハ此虫の音を聞事あたふまし、さうから  
に其意味を髣髴と穴<sup>つ</sup>不人は音を聞といふ章を  
なさすなす人は閑言語<sup>く</sup>、翁<sup>の</sup>い<sup>ふ</sup>し<sup>き</sup>聞て聞  
に來よと申されたり。恐ても懼<sup>ふ</sup>へ<sup>き</sup>事ならず

すや。詞友のいへる姿情の論にもか、休らず  
翁は寂寞と鏡りゆり嘘嗒焉として其耦を喪  
みといふ一し、康を懐のまことを要領とすれ  
ハ憂虫の詞をことさうに連玉ふへきをいはさ  
るハ懐しみおそふて物。

全

下總

眉尺

みちがきさえをはちうはす志意を明しあふ詞  
友孫有り書言にハ何む竹有上下節松無古今色か  
ゝる自然常に見常に思へとも一章にして人に  
も感せさすへきなし、さハれある時~~見~~見て

十行 廿字詰

姿情備て出た時は我もしうぬ妙ある一しや。  
假設ハ枯枝に鴉のとまりけりや秋の暮の絶唱  
の如きもかくなるさまを翁はしめてえられた  
るにもあらず。年ハにえら小たのし。人  
ハ歳ハに見るならんが歎しさすへくもあら  
ざりしを翁あつ時見て毫髪いやたち秋の暮の  
淋しきに思ひしみをそへて姿情おのつから合  
體しつ、一章なりぬるより二のかた年ハ歳々  
に人を感歎せしむ、是に俯してハいよハ高  
しとや、こハに至らんとして終<sup>修</sup>し終<sup>修</sup>するをい



かくつゝ、めきつゝ、詞友にうなつかせたるもお  
こがましきよ

全

江戸録 無

かくふる序におもひ出るあり、縣主老人いへ  
くくいにしへの<sup>世の</sup>哥は人の真こゝろ也、後の世  
の哥は人のしわざ也、又いにしへの哥はあつ  
ゝかなる如くしてよく見ればやひたり、後  
の歌は寛なる如くしてよく見ればくろくけ也  
古一の哥はかなき如くしてよく見ればくろく  
となり、後の歌はことほりある如くしてよく

は、掘地不待月地をほるは修行地なり、池成  
て月自來地を掘るは池となさむか為にして外  
に待事なし、池なへて月おのつから來るハ工  
斗さる處也、只自然なるものを憐むうちに謀  
らすして章となりぬへし、さ水はものを了  
に例の無心なるへし、わいためある時は得る  
事かたし、第令ハ乙島の居なむ空やほと、  
きす時候を斗り用了のうき名あり、又野鳥啼  
やひはりの十文字とあるはおかしきさまを其  
まゝに連ね水は合別の算用なしといふべし、

十行 廿字詰

見小は心高きなり 後の哥ハ巧みある如くし  
 てよく之れはこゝろ浅く也とすての道は其  
 本よりて明らむるにしくなし もとを廢し  
 て末にのみかゝる人多し 月のもとも人の國  
 もその代々の流行あるに同じよき人の出で本  
 へ出とす事あり 其人におくれさるがよきそ  
 へ おくる人ハ死たか如し 我十あり七  
 の文字にていふ言によく 眞こゝろ原の芭  
 蕉の翁なり 古へにもあはれもたはなる  
 ものあり 尾石なるありて 二もくも古へ

その言也いじの哥はたこの如くしよく足水は

十行 廿字詰

ある人の章に「炭」世はむつめしき接木して  
 こは元の世の如く、ろをにくみていへるなる  
 一、我みちも眞ことなるいにしへの哥とお  
 もの、心はへをまねひたらんこそあうまほし  
 けれ。

伊勢物語古意 是も何某氏の草稿の書なり

○そのさとにいとなまめいたる女はうから住  
 けり、成をどこかいまえにけり、おもほへす古  
 御にいと思はしたなくてありけりハこゝちまこ  
 むにけり。

書けり、まいて哥てふもの、なかはもていふ  
 言にことけり過たるはうるさしやいまはた流  
 行のつたあきはありのまゝにいふ、真こゝろ  
 川なくておのれいを入て人にしうせむとのサ  
 はかるものからわがうはへの謎也てふもの、や  
 うになりもて行て是をたゞすに又おのれを入  
 れされいしれおたし、あまうにいやしきやお  
 うは、もいまた謎、こふ意もつかさど見ゆ  
 まことをもまきくにいふへまあゆかし

合

合子 書 稿

△よき所によき人のあるはめつらしからす、  
 古御にほ意なくおほゆき也。へ原氏帯木の巻  
 にあばられたらん、律の門におもひのほかはに  
 りるたけなはん人のとちうれたらんこそかけ  
 りなくめつらしく覚ええていかてはたか、りけ  
 んとたかへる事あらやしく心とま<sup>る</sup>わさふ  
 べきといふはやかてまこ、を書のへたる也け  
 り、はあみにハ一くたりに<sup>の</sup>子<sup>の</sup>書<sup>た</sup>る<sup>を</sup>は、木の  
 巻なるい妻しきに過たるやうにてこそあれ、  
 成あかちを見侍得て古文のよろしきを知しと

十行 廿字詰

○詩聯句何<sup>モロカレ</sup>脆仙家、種といひ出たるを點削して  
 何といへるを弥と直せりと娘の意は仙境なる  
 種は長生に一つ小て禁も長からんとて、後の意  
 は人間世の短きをもて足らずもろき花舟小  
 ハ仙家の人のいよ／＼なうむとて、こはそこ  
 を推はかるめゆへのたかひえ、我伸活ハしう  
 さるを察す事なし。落使の之め諸越仙家の章  
 章前にあるとも其形意をもて付る程、また古  
 人の言によするものか、私の理にはさのみさる  
 あり。こゝにはおおて理り違のあやまちを知ら

きや

十行 廿字詰

○連歌の書に著す所を足るに姿情よくおもひ  
 入て前句によく附るを無上の事なりと、わき  
 て恋連懐なとの章は何のより合も入へからず  
 一つれの哥も無益なりとそ  
 雲のかゝれるそらそ淋しき  
 なかめわひぬとは人もし水月も足よ 宗卿  
 さひーき夜にのち詠あひしを思ふ  
 人もし水月し月もえよめしと下知したるよ  
 おもひに絶たさきはいはむた月しとそ  
 暮るさかひを獨あけしなる

籠のうぢを己かやとと鳥のねて 宗祇

これらはわきて何のより合もいづれの奇はし

拍ら動して玄妙なる附存ふし夕一あなは

空行鳥のやとりいつこなるそと久のさきに

あつあなる籠のうぢをわつあやととわらひて

ゆすけにゆねたうさま猶あは木なをいへる

まゝにえ附くわけを思えらるる證句あはた

なるか何ふきていはす

あもふにきると附句とはありにてあはしい 打越

や句のあらいなをさしも附たき処の趣もしるく

十行 廿字詰

して殊に分骨を称すマきものを扱はいかいと  
いふもの、附合ハうぢこしとわきて斟酌する  
ゆへにいてきて後た、に之過したる人には中  
と意味悟しあなき也、只に二章 みて許す  
へきものなうハ誰あはよき章を存さ、うをわ  
お越あるかゆへにこそ考し侍小とたひ越中  
より一時える篇の連句のうちよりしも拾ひた  
るとて附合ニ章つ、強う水ぬ、詞及ともにも  
はひ久に措い哉、うぢうしの章あは、祈可  
一き章もあきてあ、人に扱及とる連句をもを誹

蛭のし所をあきて氣味よき  
 是れをわあわち附ゆるとくよ、こは  
 ぬまのくくはといへる人あるや  
 前を  
 之のことぬとやりはむ  
 下京は宇治の茶異船さし連て  
 坊主のきたる裏の和や  
 是れの子守しは居ハツ下リ  
 孤屋  
 佐と佐とあの子草ハものハはせるか  
 之するかせねはあなす附するものを  
 其<sup>見</sup>遊カゆみさしせしきま

ありに三章を玩味しつゝ之小いあや一きははめ  
 なるもあふえあし  
 みるまにあま  
 おこま  
 一ヨリ丹誠なるぬ我りつと思ひあふ  
 稲の葉のみのちあがたき  
 花心のほしあはこゆる  
 鏡麻由  
 内苑甲路も呼聲はたれ  
 乙州  
 附了事を  
 一ヨリ三句月の徒一  
 ころろとこ<sup>よ</sup>三章のほこり物なるを  
 ずやあ高根のあふのかい水子  
 夕鏡のあまのくはは風かほる

十行 廿字詰

さままゝしるやうこそ

御用と男のなをのあま

御用のさとをうしははやくみ

ぬつたの相よりもの、出し入

はせむ

其人をあいつろふ章、これらをや

その人の人情のみ多くて、うるさ

也、人なる事のやくにあも、と

好也

如斯なる附かたの外に、一巻には種々

の奇なる處あり、又いふ、一巻の

十行 廿字詰

